

エピローグ : 愛に向かって…

2024年2月15日

読者の皆さん

もうすでにご覧になっていますね。もうすでに聞いていますね。熟考している最中、熟考している間、熟考している背後で、音楽を流していることでしょう。グルマーイは聖バレンタインデーを祝って、「愛に向かって」——彼女の愛についての驚くべき教えの数々——を与えてくれました。それは、2024年2月1日から2月14日まで、シッダ・ヨーガの道のウェブサイトで、一日一つずつ公開されています。

皆さんがこれらの教えに取り組んでいると私が確信している理由は——皆さんがそう言っているからです！ もっと正確に言えば、皆さんが自分の洞察や体験をウェブサイトで共有しているからです。私は皆さんの体験談を楽しく読んでいます。多くの方が読んだ記事や本に対して思慮深い反応をするのでしようが、私が気づいたのは、シッダ・ヨーガたちが共有することには特別な性質があるということです。皆さんが、教えを日常生活の中で学び、練習し、吸収し、実行するというグルマーイの導きを心に刻んでいることが明らかなのです。そしてこの「愛に向かって」では、愛についてのグルマーイの指導と関連させてそれを実践してきました。

その一方で、愛は私たち全員が知っていて、理解し、体験したことがあるものです。このことはとても魅惑的です。私たちは、愛に関する多くの表現に慣れ親しんでいます。おかしい表現（誰も聞いたことがないようなもの——あるいは誰か

が自ら作ったもの——愛の名の下になされた疑わしい決断など！）から、確かに崇高なものまで、実にさまざまです。

何年か前、私はまさにこのテーマについてグルマーイと会話をしました。私は2022年のディーパーヴァリーの詩の一節について彼女に尋ねました。グルマーイはこう書いていました。「恋に落ちると、あなたの内外のささいなものまで光に包まれます」。それはとても印象的なフレーズで、グルマーイが「恋に落ちる」という言葉を使ったことに興味をそそられたのです。これは一般的にロマンチックな愛を連想させる言葉ですが、私はグルマーイがこの詩で語っている愛はそれに限定されないと理解していました。

グルマーイは、このフレーズはわざと選んだと説明してくれました。「恋に落ちる」という体験——太陽の光がちりばめられてすべてに降り注ぐ靄(もや)、夜空に輝く星々がすべて自分の中にもあるように思える不思議な瞬間——は、多くの人が共感できるものです。そして、この体験はある特定の状況で生じるものかもしれませんが、その何かは、愛全般についても言えることです。このようにして、それはグルマーイが愛について教える時の基準点として働くのです。グルマーイはさらに説明して、「あなたが感じる光の輝き、人や、木や他の何かでも、それを見る時に心が高揚する様子——これは神聖な愛と何ら変わりありません」と言いました。

ですから、愛の体験には、多くの道や多くの入り口があり、私たちはそれらをよく知っています。同時に、愛について多くの誤解があることも観察できます。最初に断っておきますが——私はいつでも素敵なラブストーリーや、さらに言うならラブソングが大好きです。(少なくとも私の中では、私はこのジャンルの目利きだと思っています) しかし、読んだり観たり聞いたりしたものの多くは——さらには、私の人生に関わっている何人かの人々が私に話してくれたことすら

——愛を、痛みや苦しみと同一視する傾向があるということです。どちらか一方がなければ、もう一方を手に入れることはできない、というのが一般的な考え方なのです。そして物語に限って言えば、話の筋を前進させるのはいつも、愛に伴う葛藤や不確実性であり、それが観客にとっての最大の魅力であると考えられています。愛そのもの、そしてそれに付随する喜びや安らぎ、相互信頼は、長く思い悩むことほど興味深いものでも、また、変化に富んでいるものでもないようです。

しかし、私自身の愛の体験、特にグルマーイが私に示し、教えてくれた愛は、そうではないことを示しています。私は、かつてグルマーイが愛の本質、グルの弟子への愛について説明してくれた時のことを覚えています。彼女は私の目をまっすぐに見て、「私は、この上なくあなたを愛しています」と言いました。彼女は、片腕を空に向かって上げました。「この愛は、成層圏へ、宇宙全体へと、ただただ上昇していきます」。彼女は、地面を指差しました。「この愛は、この地球のまさに中心へと、ただただ深く伸びていきます」

その瞬間、私の頭上の空が開いているのか（きっとどこかで天使たちが歌っているに違いありません）、それとも足下の地面が動いているのか、私には分かりませんでした。しかし、私はそれを垣間見たのです——グルマーイが話していたこの愛の広大さ、無限に広がる可能性、無限の活力を。そして私は、愛が一日の終わりにそこにあるだろうか——いつまで続くのか、いつ去ってしまうのか——と思いながら、長い時間を費やしてきたことに気づきました。しかし、本当の問い掛けは、一体この私は愛に気づいているだろうか——それから、その深さを探求すればするほど、私は何を発見するのか——だったのです。その見通しは、ワクワクし、爽快なものでした。

今述べたことは、シッダ・ヨーガの道のウェブサイトに掲載されたグルマーイの教えに私を連れ戻します。「愛に向かって」。私は皆さんの体験談を読んで、皆さんも愛についてのこの微妙な違いを理解していること、古代インドの賢者たちが「相反するもの同士」（苦痛と快楽、損失と利益など）と呼ぶものを超えて、それとは別に愛が存在することを理解していると感じました。例えば、ある人は4番目の教えに対してこう書いています。「愛を体験するためには、愛をありのままに認識する努力をしなければならないことを発見しました…愛に対して先入観を被せようとする、その神秘的な存在と流れに入ることが妨げられます…まるで、愛に身を委ねれば、その独特の魔法の王国に入ることを許されるかのようです」

また、「愛に向かって」のグルマーイの教えについて理解したことを、グルマーイの2024年のメッセージの学びに関連づけた人も大勢いました。そのうちの一人が「尊厳を維持するためには、愛を重んじる必要がある」と共有しているように、皆さんは、「尊厳」が伴うものをより深く理解するようになりました。愛に向かう道を進みながら、「恩恵に心を開いていること」、そしてそれがもたらす洞察、啓示、共時性について皆さんは話していました。何よりも、皆さんの体験談は、皆さんが「自分の神性とのつながりを保つ」ために行っている努力について語り、またそれを示していました。内側のつながりを維持する手段として愛を思い起こし、愛に向かっていこうとする試みを、皆さんは描写していました。

こうした描写に私も同意したいと思います。先日、幼い子どもの親である二人のシッダ・ヨーギと話をしていました。彼らの話によると、1月のある日に、彼らの息子が、寝る前にグルマーイについての詩を書きたいと言い始めたそうです。それから数日間、彼はそうしました。彼はグルマーイへの愛を表現する詩を毎日書いたのです。

この話を聞いた時、私は信じられないと破顔しました。なぜなら、1月のまさにその日に、グルマールがバレンタインデーのために愛についての教えを毎日書きたいという願いを私に伝えていたからです。私にははっきり分かりました——その幼い男の子は同調していました。そして、そのような形で自分の心の中にある愛に敬意を払うことで、彼は彼なりのやり方で「つながりを保っている」ことを確かめていたのです。

今年のメッセージに関連して愛について最初に語ったのは、グルマールだったことを思い出す人もいるかもしれません。1月7日、「シュリー・グル・ギター」朗唱の記念日を祝うライブ映像配信によるサツァングの中で、グルマールは参加していた3人のシッダ・ヨーガのスワームに、メッセージについての自分の体験を話すように言いました。グルマールがスワームたちに話すよう求めたのは、その一人一人がメッセージを実践する具体的な計画を立てているのを彼女は知っていて、それを聞いた皆がそこから有益な洞察を得られるだろうと思ったからです。

その通りに、3人のスワーム全員がとても具体的で有益な説明をしました。中でもその中の一人が話してくれたことを取り上げたいと思います。グルマールのメッセージを実践する彼なりの方法の概要を話した後、彼は、その言葉の意味——例えば、「尊厳を持って堂々と振る舞いなさい」——を吸収することがいかに楽しかったかについて話しました。そして、彼独特のユーモアと謙遜を織り交ぜた言い回しで、「まあ、ご存じの通り、尊厳は私の得意分野ではないですから。だから意外でした」と、スワームは言いました。

スワーム・ジがそう話すのを聞いて、グルマールは笑いました。彼も笑いました。私たち皆が笑いました！ それはたぶん予想できたことでした——子どもにも大人にも愛されているこのスワームは、どこにいても、どこに行っても、喜びを引き

起こす不思議な方法を持っているのです。スワーミ・ジがそばにいと、誰もが笑うのです。

スワーミたちが席に着くと、グルマーイがほほ笑んで話しました。「言いたいことがあります。スワーミ・ジ、あなたは素晴らしい尊厳を持っていますよ」。グルマーイは続けて、尊厳にはさまざまな形があることを説明しました。グルマーイは、こんなふうに、尊厳は愛に似ていると言いました。

それからグルマーイは問い掛けました。「愛とは何ですか？」 私たち全員がこのことについて考えている時、彼女は幾つかの考えられる返答——愛を表すものとして人々が言うかもしれないさまざまなこと——を挙げました。私は、愛とは何か、愛が伴うものは何かについてグルマーイが語るのを聞きながら、その瞬間にとどまって、ただそこにいられば満足だと思ったことを覚えています。無意識のうちに、その願いは私のマインドの中で形作られていました。そしてそれは、その瞬間には現れなかったものの、ほんの数週間のうちに、私が想像できたものよりずっと壮大で美しい形で結実しました。

バレンタインデーの当日、私たちは「愛に向かって」の最後の教えを受け取りました——この一連の真に比類なき教えの頂点、集大成、最高の中の最高なものです。私たちはこの2週間まったく別の領域にいたような気がしています。愛が満ち満ちているような領域で、そこではあなたの、私の、皆の、よく言われるコップがいっぱいになっています。最初の教えが2月1日に掲載された時、私の心の中に愛——すべてのものへの、とりとめもないものへの、そしてとりわけグルマーイへの愛——が湧き上がりました。そして2日目に来て、3日目、4日目、新しい教えのたびにそれが私のお気に入りになり、そして私の体験のありようは同

じでも、同時に変化もしていきました。最初に私が感じていたのは愛の滝、次に急流、そして次には完全に穏やかな海でした。日ごとに愛が広がり、日ごとに私の愛に対する許容量が増していくようでした。

この時点では、この愛がこれ以上大きくなることはあり得ないと感じています——それでも、もっと大きくなるかもしれないと、ひそかに思ってもいます。一つの理由には、私たちは「愛に向かって」の数々の教えに立ち返り続けることができるということです。私たちは、それらへのさまざまな取り組み方を試すことができます。そして、ある特別な順番を試すことをお勧めしてもいいでしょうか？まず教えを読み、次にそれが読まれている音声を聴き、最後に今自分が理解したことを熟考しながら音楽をかけるというものです。パンフルートとそれを取り巻いて融け合っている音に耳を傾ける時、何が湧き起こるか——どんな考えやイメージがマインドに浮かぶか、どんな行動を起こしたいと思うか——に心を開いてください。インスピレーションはどんな形でも来る可能性があるし、来るだろうと言っていいと私は思います。

また、皆さんがすでに目にしている「愛に向かって」に添えられたデザインの一つについても少し紹介したいと思います。あらかじめお伝えしますが、シッダ・ヨーガの道のウェブサイトであるデザインに出合う時、ほとんど常に、それには目に映る以上のものがあります。それには特定の象徴や意味があるのです。まさに今回——すなわち、各教えの下に見られる葉の小枝のデザイン——もそうです。(加えて、この手紙に添えられているデザインも同じ種類の葉です)

これは、ニュージーランド原産のカウリの木の葉です。グルマーイは、マオリ語でタネ・マフタ、しばしば「森の神」と呼ばれる1本のカウリの木の物語から着想を得たと私に話してくれました。その樹齢は約2000年と推定されています。

「この惑星への愛から、この木はもうずっと長い間、立ち続けてきたのです」と、グルマーイは言いました。

シッダ・ヨーガの道のウェブサイトのデザインについてもう一つ注目すべき点は、私たちが取り上げたいと思うような動植物やアートワークがある世界各地を訪れたことのある素晴らしいシッダ・ヨーギたちの支援を、可能な限り受けるようにしていることです。また、シャクティ・プンジャのアーカイブに保管されているものに目を向けることも多くあります。SYDA ファウンデーションのウェブサイト部門の責任者であるサンディープ・クネーゼルは、「愛に向かって」のデザインについてのグルマーイの要望を受け取った時、すぐに誰に連絡すべきか思い付いたと私に話してくれました。彼は、ニュージーランドの神聖な地を訪れたことのある家族と、他にもそこを訪れたかもしれない何人かのシッダ・ヨーギを知っていたのです。すぐに、写真が次々と送られてきました。それ自体が、愛がいかに多くの異なる経路を経て到達し得るか——そしてその愛が引き起こしたものがいかに私たちの記憶のひだに埋め込まれられ得るかを示す、感動的な実例でした。

タネ・マフタに話を戻しましょう。これ以上ふさわしい愛の象徴があるでしょうか？ この伝説的な木のように、愛は太古の昔からあります。この高貴な木のように、愛は新しく、絶えず再生しています。この木——マオリ族で伝承される森と鳥の神——のように、愛は保護を与えます。愛は飛翔への跳躍台です。人類の創造主として祭られているこの木のように、愛は人間の魂に本質を与えます。愛はこの木のように壮大です。愛はこの木のように象徴的です。愛は今も、昔も、そしてこれからも、いつも在り続けます。

皆さんの中には、その体験談の中で、グルマーイの著書『神は純粋な心を愛する』からの規範となるグルマーイの言葉を取り上げている人たちがいました。「はじめに、愛。おわりに、愛。その間は、徳を育まなければなりません」ⁱ。「愛に向

かって」いくとはどういうことかを考える時、皆さんがこれらの言葉を思い浮かべる理由がよく分かります。

心を込めて

イーシャ・サーデサイ



© 2024 SYDA Foundation®.著作権所有。

ⁱ Swami Chidvilasananda, *My Lord Loves a Pure Heart: The Yoga of Divine Virtues*, (S. Fallsburg, NY: SYDA Foundation, 1994) p. 139.